

たか　だ　うえ　の　だん

高田上ノ段遺跡

発掘調査報告書

1987

掛川市教育委員会



たか　だ　うえ　の　だん

高田上ノ段遺跡

発掘調査報告書

1987

掛川市教育委員会

序にかえて

— 遺跡は文化 遺物は心 —

緑豊かな北方の山々のあいだから掛川市の西城を流れる原野谷川は、その流域にさまざまな段丘や沖積地などを形成し、変化に富んだ景観をみせております。

なかでも右岸の吉岡地区から南にひろがる広大な河岸段丘は吉岡原とよばれ、また、重要な遺跡が包蔵されているところとして広く知られております。

そして、これらの地域は水の便もよく肥沃な土地であるところから農耕に適しており、原始時代には既に集落が営まれておりました。その後長い年月を経て、現在は茶生産を中心とする農業地域となっております。しかし今日の茶業経営は、在来種を優れた品種に改植して生産性の向上をはかり、経営の安定化がさけばれております。しかし、改植とそこに包蔵されている遺跡の保存との調整もまた苦心するところであります。

このような状況をふまえ、周至な準備と土地所有者の埋蔵文化財に対する深い理解によって、吉岡原のなかほどに位置する高田上ノ段遺跡の発掘調査は実施されたのであります。

発掘調査は慎重に行われ、その結果、弥生時代後期の集落跡の一部であることが明らかになりました。そこには人々の生活に使った土坑、小穴などが多数発掘され、弥生時代の集落の様子を解き明かすがかりを得ることができました。

私たち市民は、先人の歴史の歩みを知る遺跡の発掘調査を、現代社会には無益なものとして否定的に捉えるのではなく、現代の社会は祖先の知恵が集結されて、長い年月をかけて今日に遺された文化遺産の基盤のうえに成り立っていることに留意したいと思います。

そして、地道な発掘調査の成果が潤いのあるまちづくりに活かされることを願うものであります。最後に、本書の刊行にあたり関係者の御指導に対し厚く御礼申しあげます。

昭和62年3月吉日

掛川市教育委員会

教育長 伊藤 昌明

例　　言

1. 本書は、昭和61年8月18日から昭和62年3月31日まで実施した静岡県掛川市高田字大塚越1048-1他に所在する高田上ノ段遺跡の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査地点の地籍は、掛川市高田字大塚越1047-1である。
3. 発掘調査は、高田上ノ段遺跡地内で計画された茶園改植に伴う緊急の発掘調査で、国および静岡県の補助金を得て掛川市教育委員会が実施した。
4. 発掘調査では、土地所有者の吉川新平・政雄両氏をはじめ周辺の土地所有者鈴木卓爾・宮崎悦両氏には、埋蔵文化財に対するご理解とご協力を頂いている。
5. 発掘調査は、掛川市教育委員会の松本一男が担当し、市内在住の戸塚和美君には多大な協力を得ている。
6. 発掘調査ならびに整理作業では、次の方々の参加を得ている。
戸塚和美・鈴木はや子・上村静子・大場しま・大庭三代子・小沢ろく・久保田まさ・鈴木きの
大場せつ・鈴木辰江・鈴木はづ子・松浦せい子・荻田百江・荻田みさ子・佐藤かやの・石川豊子
7. 本書の編集・執筆・遺物の実測・トレース等については松本が行った。
8. 発掘調査事業業務は、掛川市教育委員会教育長伊藤昌明・社会教育課長安達啓・文化係長岩井克
允のもとに社会教育課が所管した。
9. 調査によって得た資料は全て掛川市教育委員会が保管している。

凡　　例

1. 掘図における方位は、磁方位を示す(1986.8)
2. 調査によって検出・確認した遺構は、次のように表記した。
土坑：S F、小穴：S P、意味不明遺構：S X
3. 本報告書で紹介する遺構は全て1/20とし、遺物は全て1/2縮尺で統一した。
4. 掘図中に記した遺物番号は、写真図版中に記した遺物番号を共通する。

目 次

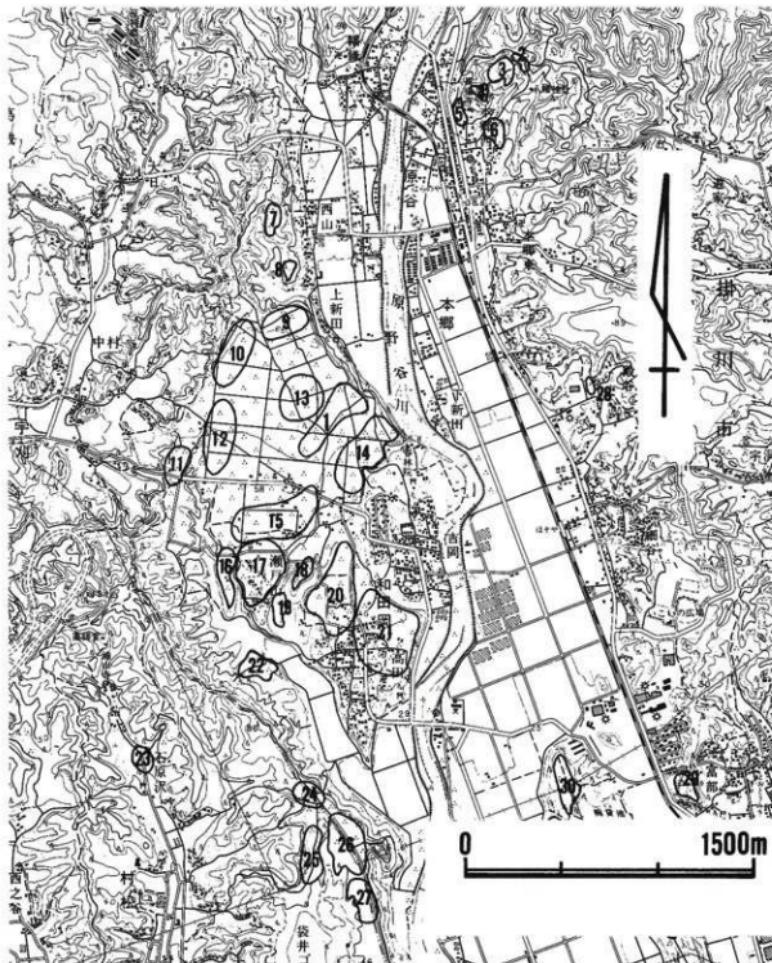
序	
例 言	
凡 例	
I 発掘調査と遺跡の概要	2
1 調査に至る経緯と調査の目的	2
2 調査の方法と経過	3
3 遺跡をめぐる環境	5
II 調査の内容	8
1 遺構	8
i 土 坑 (S F)	11
ii 小 穴 (S P)	11
iii 意味不明遺構 (S X)	17
2 遺 物	19
III 成果と課題	26

挿 図 目 次

第1図 高田上ノ段遺跡の位置と周辺の弥生時代遺跡	1
第2図 遺跡の周辺地形	4
第3図 遺構全体図	7
第4図 調査区の土層柱状図	8
第5図 S F01・S F02実測図	9
第6図 S F03・S F04実測図及びS P実測図 (1)	10
第7図 S P実測図 (2)	15
第8図 S P実測図 (3)	16
第9図 S P実測図 (4)	17
第10図 S X01実測図	18
第11図 出土遺物 (1)	21
第12図 出土遺物 (2)	22
第13図 出土遺物 (3)	23
第14図 出土遺物 (4)	24
第15図 出土遺物 (5)	25

図 版 目 次

- 図版 I 調査地点遠景（航空写真）
- 図版 II (上) 調査地点近景（発掘調査前）
(下) 調査区発掘状況（東から）
- 図版 III (上) 調査区発掘状況（北から東域）
(下) 調査区発掘状況（北から西域）
- 図版 IV (上) S P14遺物出土状況
(中) S X01上層断面
(下) S X01発掘状況
- 図版 V 出土遺物（S P出土遺物）
- 図版 VI 出土遺物（S P14・S P30・S X01出土遺物）
- 図版 VII 出土遺物（S X01出土遺物）
- 図版 VIII 出土遺物（S P・S X01出土遺物）



遺跡地名

1. 高田上ノ段遺跡	7. 後 稲 ケ 谷	13. 中 廉	19. 花 ノ 廉	25. 東 山
2. 八 海 山	8. 中 山	14. 吉 岡 下 ノ 段	20. 高 高	26. 金鶴原(久能山)
3. 又 太 郎	9. 城 ノ 廉	15. 吉 岡 廉	21. 女 高	27. 殿 ノ 古
4. 安 黒 山	10. 東 廉	16. 湘 戸 山 II	22. 平 畠	29. 二 反 田
5. 長 福 寺 西	11. 今 坂	17. 湘 戸 山 I	23. 石 原	30. 同 津 原 I
6. 古 城	12. 満 ノ 口	18. 湘 戸 山 III	24. 墓	

第1図 遺跡の位置と周辺の弥生後期～古墳時代遺跡

I 発掘調査と遺跡の概要

1 調査に至る経緯と調査の目的

掛川市の西域袋井市との境付近を北から南に向って流れる川がある。原野谷川である。この原野谷川は、掛川市・白光山赤メゾレ山に端を発し南流し、下流において垂木川、逆川などを合わせて袋井市域に入り太田川と合流する。その流さ28380mを測り、掛川市域を流れる川で最も長い。⁽¹⁾また原野谷川の流域には中・小さまざまな大きさの河岸段丘面が発達しており、同時に数多くの遺跡を持っています。古くは繩文時代創草期から弥生時代、古墳時代、古代、中世、近世、現代へと、数多くの名も知れぬ人々の生活を見て流れ続けている。これから紹介する高田上ノ段遺跡もまた、この原野谷川が永い年月をかけて築きあげた河岸段丘の一つ吉岡原（掛川市各和地区、高田地区、吉岡地区に広がる和田岡原の一つ）を舞台として繰り広げられた人間の足跡である。

現在、吉岡原をはじめ和田岡原一帯には民家の数は少なく、代って茶所掛川を象徴するかのように茶畑が広がっている。掛川市全域の中でも、この和田岡原一帯は屈指の地区となっている。いつの時代、何事にも改革はつきもので、この茶樹栽培においても近年来より品種改良が行われている。この品種改良では、水はけを考慮した耕作土の入れ替え（地表土と地山上との転換“天地返し”）が取り入れられており、大地に刻まれた人々の足跡（遺跡）に思わず歎息をもたらす結果となった。

掛川市教育委員会では、昭和53年度より静岡県教育委員会の指導を受けまずは現存する古墳群の測量⁽²⁾、あるいは消滅を免れない状況となつた遺跡に対し発掘調査を毎年のように行うこととし、一方では国および静岡県の補助金を得て昭和56年度から昭和58年度三ヶ年間をかけて市内遺跡分布調査事業⁽³⁾を行い、市内に所在する遺跡を把握するよう努めてきた。しかし、残念ながら和田岡原でのこうした処置も時すでに遅く、相当数の遺跡が何も語らぬまま大地に消えていった。

今回調査の対象となつた高田上ノ段遺跡のこの地点も茶樹改植の対象となつた地点で、遺跡の記録保存を目的として、国および静岡県の補助金を得て掛川市教育委員会が行った発掘調査である。

《参考文献》

- (1) 若森英雄他 「掛川市誌」 掛川市・掛川市誌編纂委員会
- (2) 平野吾郎・植松章八・岩井克允 「瓢塚古墳 測量調査報告書」 掛川市教育委員会（1979）
植松章八・岩井克允 「吉岡大塚古墳 測量調査報告書」 掛川市教育委員会（1980）
植松章八・平野吾郎・岩井克允 「各和金塚古墳 測量調査報告書」 掛川市教育委員会（1981）
- (3) 平野吾郎・岩井克允・松本一男 「中原遺跡発掘調査概報」 掛川市教育委員会（1982）
岩井克允 「金鑄原遺跡発掘調査概報」 掛川市教育委員会（1982）
松本一男 「行人塚遺跡発掘調査概報」 掛川市教育委員会（1983）
松本一男 「中原遺跡発掘調査報告書」 掛川市教育委員会（1984）
松本一男 「女高遺跡発掘調査概報」 掛川市教育委員会（1985）
松本一男 「高田上ノ段遺跡発掘調査報告書」 掛川市教育委員会（1986）
- (4) 『掛川市遺跡地名表』 掛川市教育委員会（1982）
『掛川市遺跡地図』 掛川市教育委員会（1983）
瀬川裕市郎他 「掛川市遺跡分布調査報告Ⅰ」 掛川市教育委員会（1984）

2 調査の方法と経過

今回実施した発掘調査地点は、昨年度の調査地点のすぐ南隣りに位置する地点で、標高はおよそ60m付近、東側が段丘縁辺部となる。

今回の調査でのグリッド設定は、前回の高田上ノ段遺跡発掘調査事業（昭和60年度）時に設定したものに従った。つまり前回調査区の北東端農道に接した地境杭を基点とし、前回調査区北西端の農道に接した地境杭を結んだ線を基本線とした。さらに基点を（A, 1）杭とし、基本線に沿って5m毎に（B, 1）、（C, 1）、（D, 1）、…、基点から90°南向き5m毎に（A, 2）、（A, 3）、（A, 4）、…、と杭をそれぞれ落とした。区画の名称は、それぞれの区画の北東角に位置する杭の名称を与え、杭（C, 3）の南西に位置する区画は（C-3）グリッドと呼称した。尚、設定した南北方向の区画線（グリッドライン）は、N-12°00' - Eである。今回の調査区は（A-10）グリッドから（G-9）グリッドを結ぶ線を北壁とし、（B-15）グリッドから（H-14）グリッドを結ぶ線を南壁とする範囲である。

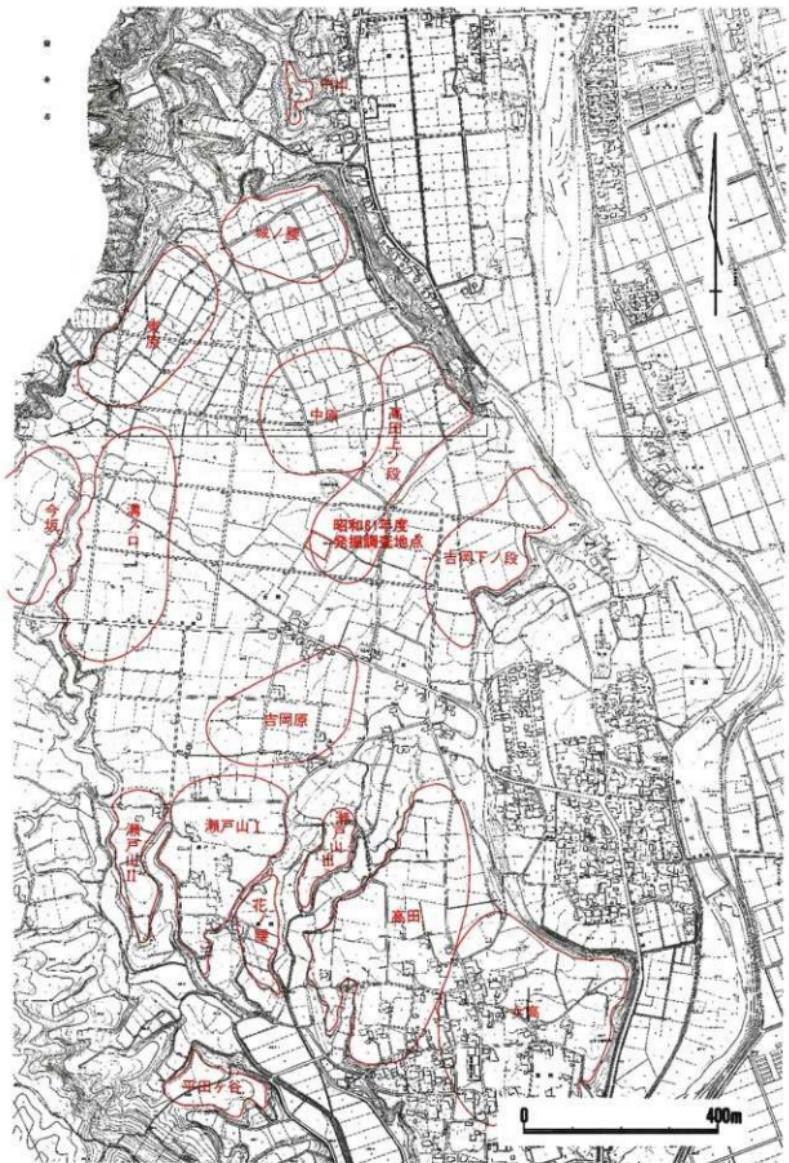
調査時における遺物の取り上げは、遺構外出土遺物については上記の区画に従って表記し、遺構内出土遺物については遺構毎にドット化して行った。また検出遺構の位置については、上記設定の区画表示に従い行った。

現地での図面は、小区画にあわせ20分の1縮尺で遺構全体図を作成し、遺構内遺物出土状況・主なる遺構の平・断面図等を10分の1縮尺により図面の作成を行った。

写真による記録は、ブローニーサイズ（6×7）原画白黒、35mmサイズ原画白黒・カラーリバーサル撮影により行った。

現地での発掘調査は、昨年度行った発掘調査結果に基づき重機を導入し耕作土を除去することから始め、引き続いて人工による掘削作業、遺構・遺物の確認・掘削を行った。以下日程に従い現地発掘調査の経過について記述する。

- | | |
|-------------------|---|
| 昭和61年 8月18日～8月20日 | 重機稼動による耕作土の掘削・排土作業 |
| 8月20日～8月21日 | 発掘器材の搬入 |
| 8月25日～8月27日 | 調査区内壁調整・土層観察・調査区内への杭打ち |
| 9月1日～9月13日 | 調査区南東域から北西域に向う形で人工による掘削・精査・遺構確認。 |
| 9月16日～10月8日 | 遺構掘削。S P14・S P30・S X01については遺物出土状況図化。他のS Pについては上層断面図化等を行う。 |
| 10月13日～10月22日 | S X01掘削する一方調査区全域に釘落しを行い、遺構全体図の作成を行う。 |
| 10月23日～10月24日 | 調査区全体精査。 |
| 10月25日 | 調査区全体の完掘写真撮影を行い、現地調査の全工程を終了とする。 |
| 10月27日～10月28日 | 重機により埋戻しを行う。 |



第2図 遺跡の周辺地形

3 遺跡をめぐる環境

地理的環境 先にも述べたとおり、高田上ノ段遺跡は二級河川原野谷川が中流域に形成した河岸段丘（通称吉岡原）上に営まれた弥生時代後期を中心とした集落跡である。

この原野谷川は、掛川市の北部八高山赤メゾレ山にその源が求められ、そこから南下し原泉・原田地区において数多く蛇行することにより小規模の舌状台地を形成、平野の広がる原里・原谷地区より右岸に小規模な河岸段丘を形成する。さらに南下し和田岡地区（吉岡・高田・各和）において右岸にのみさらに規模の大きな河岸段丘を形成し、その南東今度は左岸の岡津原に同様の段丘面を形成する。高田上ノ段遺跡の占地する和田岡原（特に吉岡原・高田原）は、大きく見て二段丘面をもっている（第2図参照）。上位段丘面は標高60m前後、下位段丘面は標高40~50mの高さを測る。さらに細かく観ると下位段丘面は標高40m代と標高30m代の二面にわけられるようである（通称高田原と呼ばれる一帯に観られる）。ちなみに高田上ノ段遺跡は上位段丘面の東端に位置する。

和田岡原のうち吉岡原・高田原全体を細かく観ると西域一帯の等高線が大きく入り込む状況が確認される（第2図参照）。幾本もの小谷が南から北に向い吉岡原・高田原を切り刻むように入り込んでいる。等高線の状況からこれら小谷は吉岡原のかなり内陸部にまで入り込んでいたのではないかと想像される（それゆえに内陸部にも繩文時代・弥生時代の集落跡が確認できるものと考えられる）。

この和田岡原の地質は、段丘推積層（白黄褐色の礫層）として示されているが、内陸部の地表付近にはローム層・黒色土層等の堆積が確認される。ただ段丘端部付近では、これらローム層・黒色土層の堆積は少なく表土直下に礫層が認められる。

《参考文献》

- (1) 若森英雄他 『掛川市誌』 掛川市・掛川市誌編纂委員会（1968）
- (2) 「ふる里発見第3集 掛川の植物」 掛川市教育委員会（1981）
『掛川地方地質図』 地質調査所（1963）
- (3) 松本一男 『行人塚遺跡発掘調査概報』 掛川市教育委員会（1983）
松本一男 『女高遺跡発掘調査概報』 掛川市教育委員会（1985）

歴史的環境 先にも述べたとおり、この高田上ノ段の東域を北から南に流れる原野谷川流域には中小の河岸段丘が形成されており、これらを占地とする遺跡も数多く存在する。時代で観ても古くは繩文時代早期から弥生時代・古墳時代と長い時間利用してきた所もある。高田上ノ段遺跡が占地する吉岡原でも繩文時代早期から古墳時代の集落跡・古墳などの遺跡が数多く分布する。

第1図では、高田上ノ段遺跡を中心にということで弥生時代後期から古墳時代前期の遺物を出土あるいは採集できる遺跡をマップしてみた。和田岡原の上位段丘面には高田上ノ段遺跡をはじめ、内陸部に城ノ腰・東原・溝ノ口・今坂の各遺跡、段丘端部に吉岡原・瀬戸山I~III・花ノ腰・高田・女高の各遺跡が分布する。また南の各和原には東山・金鉢原（久能山）・陣屋北などの遺跡、対岸南東位の岡津原には岡津原I~IVの各遺跡がまとまって分布する。しかし和田岡原の対岸には小規模の遺跡は分布するものの当該期の遺跡（弥生時代後期~古墳時代前期）の分布は少ない（これは遺跡の立地すべく地形的条件が満足されるものでなかったことによると考える）。

ところで、遺跡の分布状況を北は原谷・幡ヶ谷地区、南は曾我・徳泉、袋井市域東端にまで範囲拡げ、採集遺物から各遺跡の継続時間を眺めてみよう。

a 繩文時代晩期末に成立し古墳時代前期まで継続する遺跡……瀬戸山II、岡津原I、岡津原III

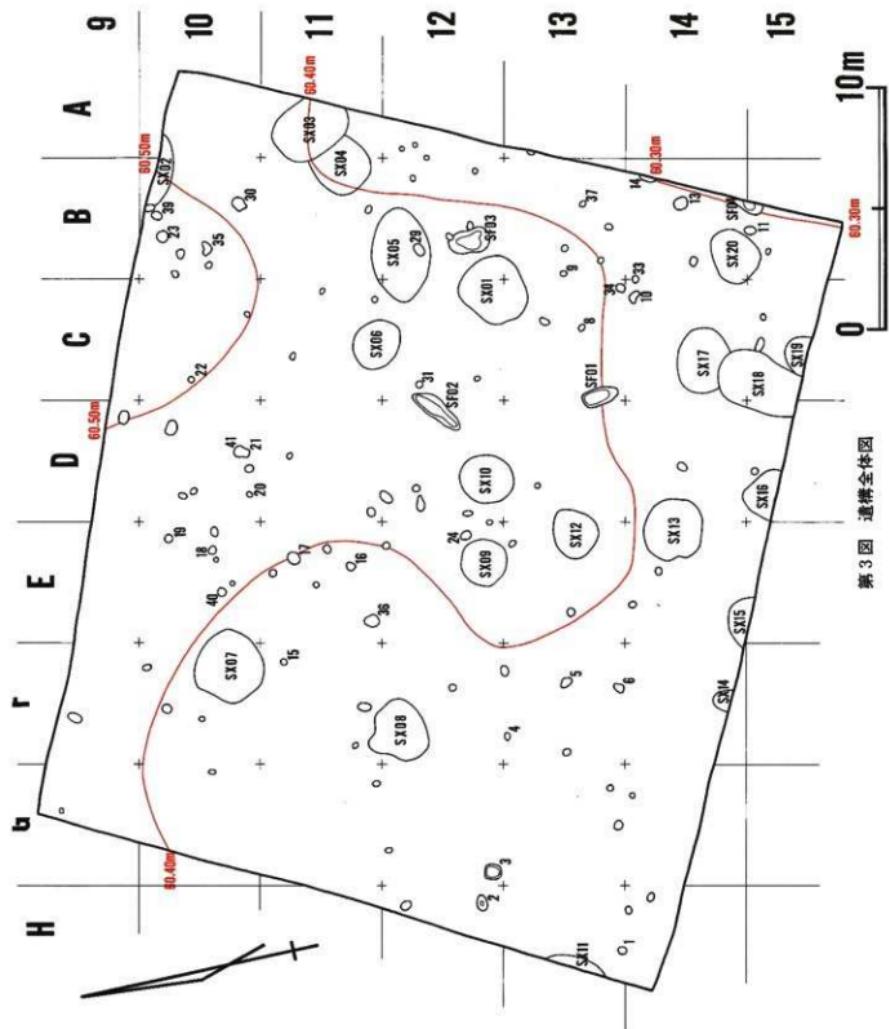
- b 繩文時代晩期末に成立し古墳時代中期以降まで継続する遺跡……吉岡下ノ段
 - c 弥生時代中期に成立し弥生時代中期で終結する遺跡……二反田、原川⁽²⁾
 - d 弥生時代中期に成立し弥生時代後期まで継続する遺跡……八海山、又太郎、長福寺西、金鑄原(久能山)、山下、梅橋北⁽³⁾⁽⁴⁾
 - e 弥生時代中期に成立し古墳時代前期まで継続する遺跡……女高⁽⁵⁾、東山、陣屋北
 - f 弥生時代後期に成立し弥生時代後期で終結する遺跡……安里山、古城、中原、殿ノ台、石原沢、浅間裏、宇佐八幡内、国本、岡津原II
 - g 弥生時代後期に成立し古墳時代前期まで継続する遺跡……幡塚峰山、中山、東原、溝ノ口、吉岡原、高田上ノ段、瀬戸山I・瀬戸山III、花ノ腰、平田ヶ谷、岡津原IV
 - h 弥生時代後期に成立し古墳時代中期以降まで継続する遺跡……後藤ヶ谷、城ノ腰、高田
- 以上のような状況となる。これらについては以前にもまとめたところであるが、今一度吉岡原・高田原における状況についてまとめると、瀬戸山II・吉岡下ノ段・女高の各遺跡を母体として弥生時代後期になるとこれら以外の遺跡、中原・東原・溝ノ口・吉岡原・高田上ノ段・瀬戸山I・瀬戸山III・花ノ腰・高田などが発生する。さらにはこれら数多くの遺跡群が母体となって古墳時代中期（5世紀）にいたって和田岡古墳群を築造すべく集団が成立したと考えられる。

こうした周辺環境の中で高田上ノ段遺跡に生きた人々は、弥生時代後期から古墳時代前期という短い時間であったが集落を形成したものと思われる。

《参考文献》

- (1) 佐藤由紀男「弥生時代の遺跡の概要」『掛川市遺跡分布調査報告Ⅰ』 掛川市教育委員会（1984）
- (2) 梶田博之・羽生保『原川遺跡 昭和59年度発掘調査概報』（財）静岡県埋蔵文化財調査研究所（1985）
- (3) 前田庄一・松本一男『山下遺跡』袋井市教育委員会・掛川市教育委員会（1984）
- (4) 松本一男『梅橋北遺跡発掘調査報告書』掛川市教育委員会（1985）
- (5) I - 3 の参考文献(3)に同じ
- (6) 松本一男『高田上ノ段遺跡発掘調査報告書』掛川市教育委員会（1986）

第3図 造構全体図



II 調査の内容

今回の調査で確認した遺構は、第3図遺構全体図に示したとおりで土坑(SF)が4、小穴(SP)が104、その他意味不明遺構(SX)20である。これらの遺構が構築された時期は、遺構内からの出土遺物、周辺の遺構出土遺物からおおむね弥生時代後期後半と考えられる。

調査区内に10cm毎の等高線に描いてみると(第3図)、前回調査時と同様北寄に高く(60.50m)、南・東に向って緩やかに低くなっている(60.30m)ことがわかる。また遺構の分布状況を見てみると、柱穴状の小穴が調査区の東側寄りに検出しており、前回確認した住居跡が今次調査区域の北東位に隣接することなどを考え合わせると、前回述べたとおり高田上ノ段遺跡の中心部(住居跡群が集中する位置)が今回ならびに前回の調査地点の北東域から南東域にあることが想定される。

尚、今回の調査地点での上層は第4図に示したとおりで、基本的にはI層(表土・耕作土)、II層(黒色土)、III層(黄褐色土)で構成される。前回調査地点での土層と比較すると、前回確認した暗褐色土層(II層とIII層の間に確認した土層)が今次調査地点では確認できなかった。

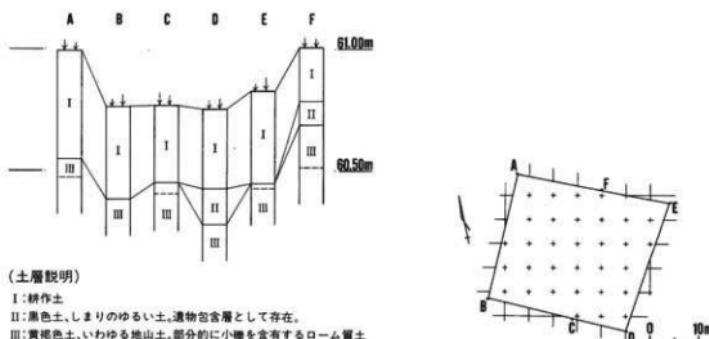
《参考文献》

- (1) 松本一男『高田上ノ段遺跡発掘調査報告書』掛川市教育委員会(1986)

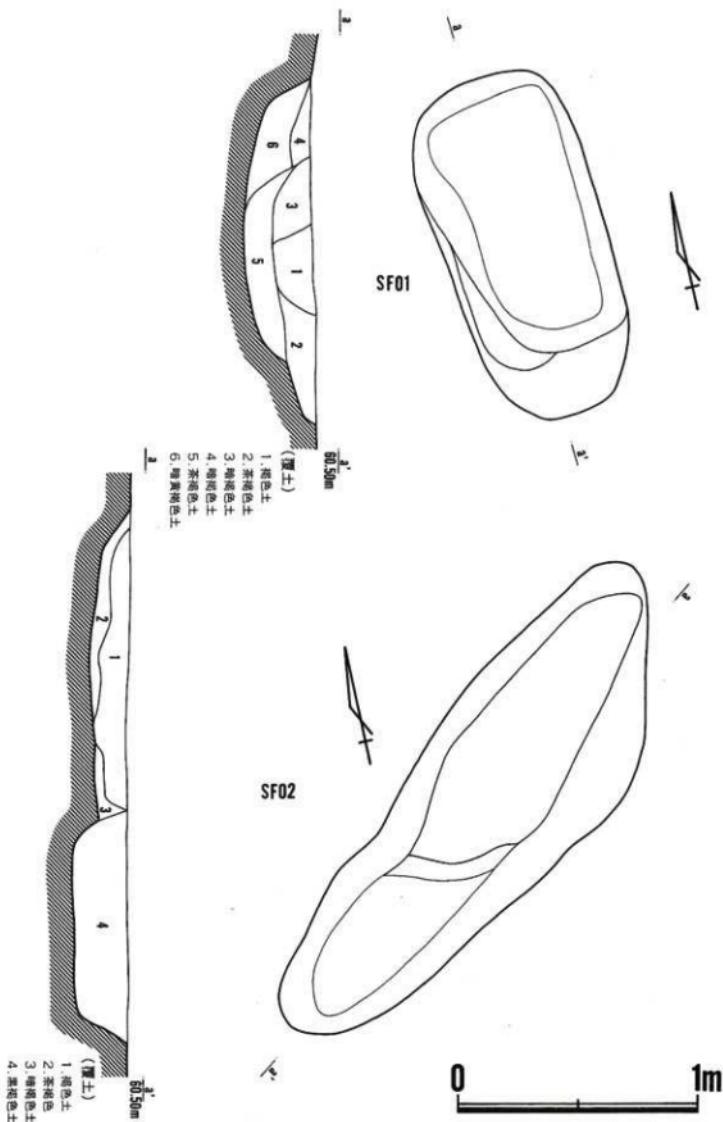
1. 遺構 (第5図~第10図)

今回確認した遺構は前述したとおりで、土坑(SF)4、小穴(SP)104、時代・遺味不明遺構(SX)20であり、内容から集落跡周辺部の遺跡のあり方を示すものと考えている。

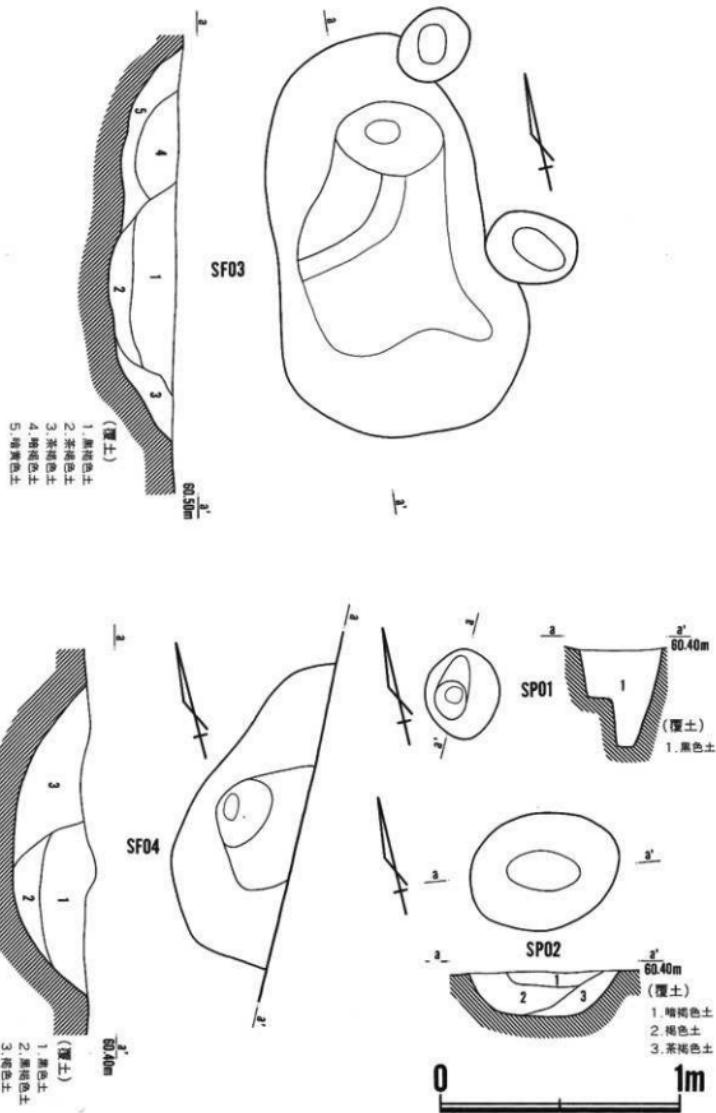
この項では、土坑の全てと小穴では特に柱穴状を示した小穴を、また時代・遺味不明遺構については遺構確認面で出土遺物のあった1基のみを紹介することとした。



第4図 調査区の土層柱状図



第5図 SF01・SF02実測図



第6図 SF03・SF04実測図及びSP実測図(1)

i 土坑 (S F) (第5図・第6図)

今回の調査で土坑として扱った造構は全部で4基である。具体的には後述するが、これらはどれも形状その他の状況から土壤墓的のものでなく、たんなる穴（土坑）的な状況であり、S F02にいたっては周辺の土質状況等からS Xとして同一視できるものと考えている。とりあえず以下S F01から順に調査状況を記していく。

S F01 検出した位置は、C～D-13Gridである。平面プランは長方形に近く、最も人為的な土坑である。規模は長径144cm・短径68cmで確認面から床面までの深さ28cmを測る。長軸方向は、N-5°-Wである。出土遺物はない。

坑内の覆土は、6分層され①褐色土層（粘性がやや強く、しまりの強い土）、②茶褐色土層（粘性や強くしまりのある土）、③暗褐色土層（粘性やや強くしまりのある土）、④暗褐色土層（粘性はあるがしまりのない土）、⑤茶褐色土層（粘性がありしまりのある土）、⑥暗黄褐色土層（ロームとの混溶激しく全体的に黄色味のある土で、粘性・しまりともにある土）で構成されている。

S F02 検出した位置は、C～D-12GridでS F01の北側に位置している。平面プランは不整形で、規模は長径237cm・短径79cmである。掘り方は、北側に確認面からの深さ15cm程の平らなテラスをもち、南側で一段深くなる（確認面からの深さは22cm前後である）。長軸方向はN-48°-Eを測る。S F02からの出土遺物は全くなかった。

坑内の覆土は、①褐色土層（3mm前後の小砂利を含む、粘性・しまり共にある土）、②茶褐色土層（粘性・しまり共にある土）、③黒褐色土層（ロームがマーブル状に混入する土で、粘性は強いがしまりのない土）、④黒褐色土層（3～5mmの小砂利が少量含まれる土で、粘性は強いが、しまりのない土）で構成されている。

S F03 検出した位置は、後述するS X01のすぐ東側のB-12Gridである。東と西側においてそれぞれ小穴が接して検出している。平面プランは不整形円形で、規模は長径167cm・短径98cmを測る。掘り方では、南側が北側よりも一段深く確認面からの深さ30cmを測る。長軸方向はN-5°-Eで、ここからの出土遺物も全くなかった。

坑内の覆土は、①黒褐色土層（大石・小石が多量に含まれ、粘性・しまり共にある土）、②茶褐色土層（粘性・しまり共にある土）、③茶褐色土層（砂粒が少量であるが含まれ、粘性・しまり共にある土）、④暗黄褐色土層（ロームとの混溶が激しく全体的に黄色味のある土で、粘性はないがしまりの強い土）で構成されている。

S F04 検出した位置は、今時調査区の南東隅のB-14～15Gridで、S X20のすぐ東隣りに検出。残念ながら東側半分近くが調査区域外にあり全体像は確認できなかった。したがって平面形・規模は不明である。長軸方向は、N-47°-Eか？ 出土遺物はない。

坑内の覆土は、①褐色土層（3mm前後の小石を少量含む土で、粘性・しまり共に強い土）、②黒褐色土層（粘性・しまり共に強い土）、③褐色土層（粘性・しまり共に強い土）で構成されている。

以上が今回確認した土坑である。それぞれからは出土遺物がなく、これらの土坑の掘削時期は明らかではないが、周辺からの出土遺物等から考えて他の小穴群と同様の時期、弥生時代後期であると考えている。

ii 小穴 (S P) (第6図～第9図)

今回の調査で確認した小穴の数は全部で104基である。具体的には後述していくが、これら小穴群は、

住居跡の柱穴状に配列するものあるいは掘立柱建物跡状に配列するものはなく、それぞれが独立して存在しているようである。ただしこれら104基の小穴の中には後述する一群のように柱穴状を示すものがあったということを付記しておきたい。

S P01 調査区の南西隅H-13~14Gridに検出した。平面形は不整円形であるが、断面では柱穴状を示している。規模は長径38cm・短径31cmを測り、確認面からの深さは41cmを測る。出土遺物はなかった。

覆土は、①褐色土層（ローム粒が少量混入する上、粘性はあるがしまりのゆるい土）の單一層で構成されていた。

S P02 検出した位置は、調査区の西壁際H-12GridでS P03のすぐ西侧に位置している。平面プランは梢円形で、断面形で皿状を呈している。規模は、長径62cm・短径49cmを測り、もっとも深いところで確認面から19cmを測る。出土遺物はない。

覆土は、①暗褐色土層（粘性・しまり共にある土）、②褐色土層（ローム粒が少量含まれる土で、粘性・しまり共に強い土）、③茶褐色土（ロームの溶混が見られる土で、粘性が強くしまりのある土）で構成されている。

S P03 検出した位置は、G-12Gridの南西隅でS P02の東隣りである。平面プランは不整方形で、断面形で皿状を呈している。規模は、長径68cm・短径61cmを測り、確認面からの深さは9cmである。出土遺物はない。

覆土は、①黒褐色土層（ローム粒が混入する上、粘性・しまり共にない土）の單一層である。

S P04 検出した位置は、F-13Grid北寄りである。平面プランは不整円形で、規模長径33cm・短径25cmを測り、確認面から24cmを測る深さをもつ。ここからの出土遺物はなかった。

覆土は、①黒色土層（混入物なく、粘性がややあるもののしまりのない土）の單一層である。

S P05 F-13Grid中程に検出した小穴で、S P06の北側に位置する。平面プランは不整形で、規模は長径58cm・短径28cmで確認面から21cmの深さをもつ。ここからの出土遺物はない。

覆土は、①黒色土層（3mm前後の小石とローム粒を少量混入する土で、粘性はあるがしまりのあまりない土）の單一層である。

S P06 S P05と同じF-13Gridに検出した小穴で、S P05の南側に位置する。平面プランは、不整形である。規模は、長径48cm・短径35cm・確認面からの深さ19cmを測る。ここからの出土遺物はない。

覆土は、①黒褐色土層（1~2mmの小石を少量含む土で、粘性はなくしまりのある土）、②黒褐色土層（ローム粒が多量に含まれる土で、粘性・しまり共に強い土）の二層で構成される。

S P08 C-13Grid中程のS F01東側に位置する小穴である。平面プランは不整円形であるが、断面形で柱穴状を呈す。規模は、長径30cm・短径26cm・確認面からの深さ36cmを測る。ここからの出土遺物はない。

覆土は、①黒褐色土層（粘性非常に強いもの、しまりのない土）の單一層である。

S P09 B-13Gridの西際に検出した小穴で、S P08の東・S X01の南に位置する。平面プランは円形、断面形において柱穴状を呈している。規模は、長径25cm・短径23cm・確認面からの深さ24cmを測る。ここからの出土遺物はない。

覆土は、①黒色土層（3mm前後の小石を少量含む上、粘性・しまり共にある土）の單一層である。

S P10 C-14Grid北東隅に検出した小穴で、周辺にS P33・S P34がある。平面形は、不整形である。規模は、長径55cm・短径35cm・確認面からの深さ37cmを測る。この小穴からの出

土遺物は第11図1の土器小破片である。

覆土は、①暗褐色土層（3mm前後の小石を少量含む土で、粘性がありしまりの強い土）、②黒色土層（ローム粒が少量含まれる土で、粘性が強くしまりのある土）、③茶褐色土層（ロームとの混ざが観られ全体的にボソボソした土で、粘性・しまり共にない）の三層で構成されている。

S P11 調査区の南東隅B-14~15Gridに検出した小穴で、S F04の西隣り、S X20の東隣りに位置する。平面プランは不整橈円形で、規模長径55cm・短径40cm・確認面からの深さ32cmを測る。この小穴からの出土遺物は、第11図2・3の土器破片である。

覆土は、①黒褐色土層（3mm前後の小石を少量含む土で、粘性・しまり共にある土）、②暗褐色土層（ローム粒が少量混入する土で、粘性が非常に強くしまりのある土）、③茶褐色土層（ロームとの混ざが見られる土で、粘性が非常に強いものしまりのない土）三層で構成されている。

S P13 調査区の東壁際B-14Gridに検出した小穴で、北にS P14、南にS F04が位置している。平面形は不整形で、小穴の底が一部南へ入り込む形となっている。規模は、長径55cm・短径44cm・確認面からの深さ40cmを測る。この小穴からの出土遺物は、第11図4の土器破片である。

覆土は、①黒色土層（3mm前後の小石を少量含む土で、粘性・しまり共にある土）、②暗褐色土層（粘性が非常に強く、しまりのある土）の二層で構成される。

S P14 調査区の東壁際B-14Gridに検出したもので、S P13のすぐ北側に位置している。平面プランは橈円形で、規模長径71cm・短径42cm・確認面からの深さ30cmを測る。S P14からの出土遺物は、第11図5~第12図24の土器破片である。

覆土は、①黒色土層（5mm前後の小石とまとまった土器片を含む土で、粘性・しまり共にある土）、②暗褐色土層（やや大きめな石を含む土で、粘性が非常に強くしまりのある土）の二層によって構成される。

S P15 F-11Gridの北東域に検出した小穴で、S X07のすぐ南側に位置する。平面プランは円形で、断面では柱穴状を呈する。規模は、長径29cm・短径28cm・確認面からの深さ38cmを測る。S P15からの出土遺物は、第12図25の土器破片である。

覆土は、①黒色土層（含有物特になく、粘性が非常に強いもののしまりは全くない土）の単一層で構成される。

S P16 E-11Grid南域に検出した小穴で、周辺にS P17・S P36などの小穴が存在する。平面プランは不整形である。規模は、長径44cm・短径34cm・確認面からの深さ27cmを測る。このS P16からの出土遺物はない。

覆土は、①暗褐色土層（ロームの混入が見られる。粘性があり、しまりの非常に強い土）の単一層で構成される。

S P17 S P16と同じE-11Gridに検出した小穴で、S P16の北側に位置する。平面プランは不整円形で、断面形では南寄りで一段深くなる。規模は、長径51cm・短径47cm・確認面からの深さ30cmを測る。ここからの出土遺物はない。

覆土は、①暗褐色土層（ロームの混入が見られる。粘性はさほどないが、しまりの非常に強い土）の単一層で構成される。

S P18 E-10Gridの東域に検出した小穴で、周辺にはS P19・S P40などが共に検出している。平面プランは不整五角形で、規模長径39cm・短径36cm・確認面からの深さ21cmを測る。ここからの出土遺物もなかった。

覆土は、①黒色土層（粘性はさほどないが、しまりの非常に強い土）、②暗褐色土（ロームの混入が

見られる。粘性は強いがしまりのあまりない土) の二層で構成される。

S P19 E -19Grid東域に検出した小穴で、S P18の北側に位置する。平面プランは不整円形で、断面形では柱穴状を呈する。規模は長径31cm・短径30cm・確認面からの深さ33cmを測る。ここからの出土遺物はない。

覆土は、①黒褐色土(粘性がやや強いもののしまりはある)の単一層で構成される。

S P20 D -10Grid南西隅において検出した小穴で、付近にS P18・S P21・S P41などがある。平面プランは不整円形であるが、断面形で柱穴状を示す。このS P20からの出土遺物は、まったくない。

覆土は、①暗褐色土(ローム粒が少量散見される上で、粘性がまったくないもの非常にしまりのある土)、②黒褐色土(小石が少量含まれる上で、粘性はあるがしまりのない土)の二層で構成される。

S P21 D -10Grid南域に検出した小穴で、S P41に隣接している。平面プランは不整円形で、断面形で柱穴状を呈する。規模は長径34cm・短径31cm以上・確認面からの深さ40cmを測る。この小穴からの出土遺物は、第12図26・27である。

覆土は、①褐色土(小石を少量含む土で、粘性が非常に強いがしまりのまったくない土)、②茶褐色土(ロームとの混が見られる土で、粘性は非常に強くあるがしまりのまったくない土)の二層によって構成される。

C -10Grid西域に検出した小穴である。平面プランは円形で、断面形において柱穴状を呈する。規模は長径28cm・短径23cm・確認面からの深さ30cmを測る。

覆土は、①褐色土(ローム粒の混入が見られる土で、粘性が弱くしまりのある土)、②暗褐色土(小石を少量含む土で、粘性はあるもののしまりのゆるい土)の二層で構成されていた。

S P23 B -10Grid北域に検出した小穴で、付近にはS P39・35・S X02など多数が集中している。平面プランは円形で、断面形で柱穴状を呈する。規模は長径57cm・短径50cm・確認面から最も深いところで30cmを測る。この小穴からの出土遺物は、第12図28である。

覆土は、①黒褐色土(粘性は弱いもののしまりのある土)、②暗褐色土(粘性は強いがしまりのゆるい土)の二層で構成される。

S P24 E -12Grid南東域に検出した小穴で、東にS X10、西にS X09が隣接している。平面プランは不整方形で、断面形でも方形状を呈する。規模は、長径48cm・短径35cm・確認面から最も深いところで23cmを測る。この小穴からの出土遺物はない。

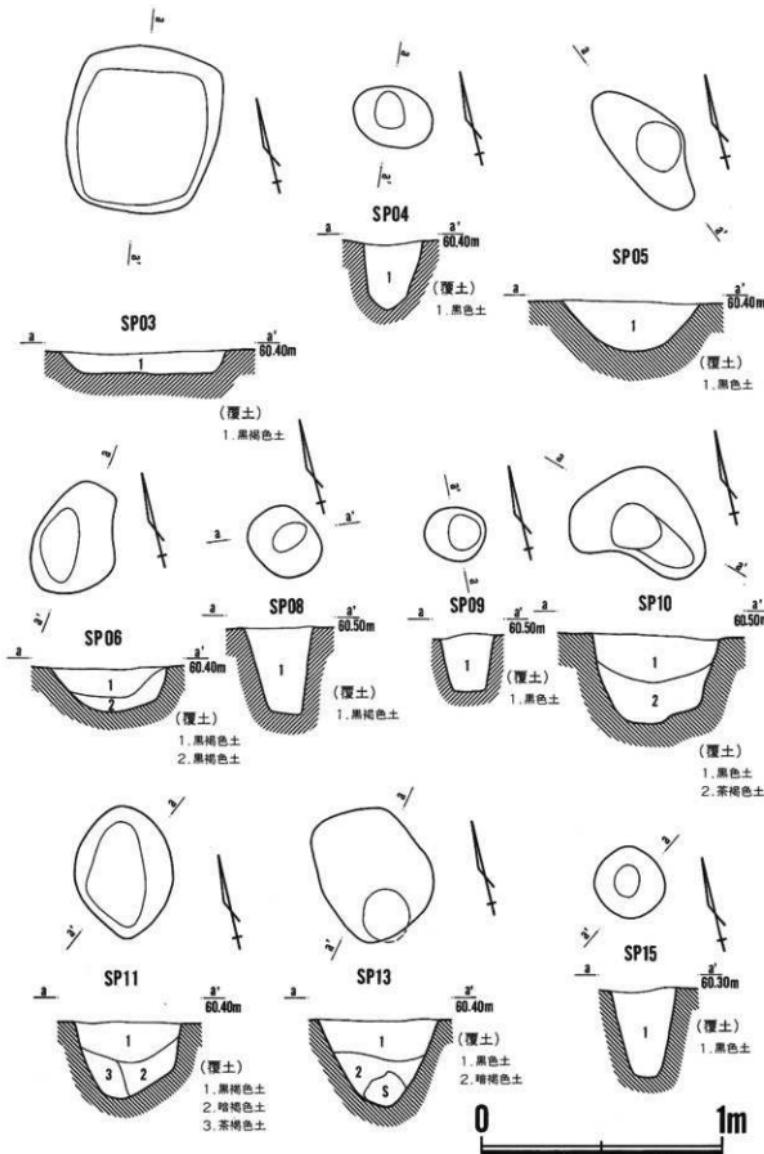
覆土は、①黒色土(小石を少量含む土で、粘性がありしまりのある土)、②茶褐色土(ローム粒が散見される土で、粘性が非常に強くあるもののしまりのない土)の二層で構成される。

S P29 B -12Grid S X05の内側に検出した小穴で、南にS F03・S X01が位置する。S P29がS X05内において明瞭に確認できたことから、S X05はS P29よりも古いものであることが確認できた。S P29の平面プランは不整方形で、北寄りにテラスをもつ。規模は、長径52cm・短径36cm・確認面から最も深いところで22cmを測る。S P29からの出土遺物は、第12図29・30である。

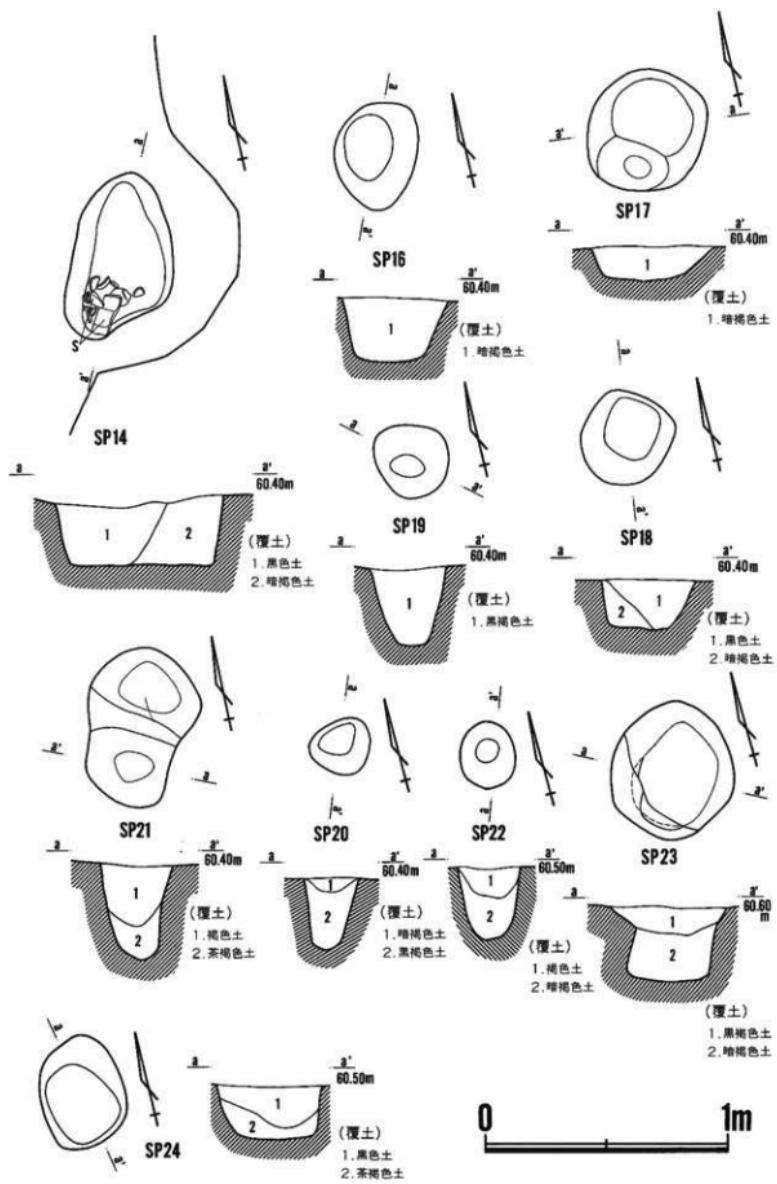
覆土は、①黒色土(粘性しまりともなく、全体的にボソボソした土)、②褐色土(ローム粒が混在する土で、粘性しまりともにある土)の二層で構成される。

S P30 調査区の北B -10Grid南域に検出した小穴である。平面プランは不整方形で、断面形もほぼ方形状を呈す。規模は、長径54cm・短径50cm・確認面からの深さ30cmを測る。S P30からの出土遺物は、第12図31~35である。

覆土は、①黒色土(小石を少量含む土で、粘性はあるがしまりのゆるい土)、②暗褐色土(ローム粒



第7図 S P実測図(2)



第8図 S P実測図(3)

が混在する土で、粘性しまりともない土)、③暗褐色土(ロームが②よりも多く混在する土で、粘性は少ないがしまりのある土)の三層で構成される。

iii 意味不明遺構 (S X) (第10図)

ここで扱う意味不明遺構(S X)とは第10図に示したもので、覆土黒褐色土中から遺物は出土するものの、平・断面形状において不安定なものをさす。同様のものは、今回の調査では全部で20基確認しているが、昭和58年度中原遺跡発掘調査⁽¹⁾、昭和60年度高田上ノ段遺跡発掘調査⁽²⁾でも確認している。これらS Xは、これまでの調査所見から“風倒木痕”でないかと判断している。この為今回の報告では、確認面において出土遺物のあったS X01のみを報告することとし、他は割愛させていただく。

C-13坑を中心B~C-12~13Gridにわたり位置する。東側にS F03が隣接する。

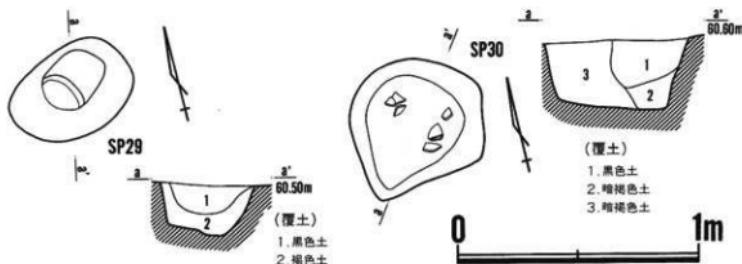
S X01 平面プランは不整形で、断面形では楕状を呈する。規模は、長径280cm・短径250cm・確認面から最も深いところで68cmを測る。出土遺物は、今回の調査で確認した遺構の中で最も多く第13図47から第15図87までのものである。

覆土は第10図に示したごとく五種の土で構成されており、中央の暗黄褐色土、黄褐色土を囲むように黒褐色土・暗褐色土が覆い、人為的でない状況を示している。以下具体的に土層説明を加えたい。
①黒褐色土(小石を含む土で土器破片を多量に出土した。粘性は強いが、しまりのない土)、②暗黄褐色土(ローム質の上で礫を多量に含む。粘性・しまりとともに強く堅緻である)、③黄褐色土(礫の含有が最も多く、粘性はあるがしまりではなくボソボソした土)、④暗褐色土(ロームが混在する土で、粘性・しまりとともに強い)、⑤暗褐色土(ロームの混在が見られ、粘性・しまりとともに強い)である。

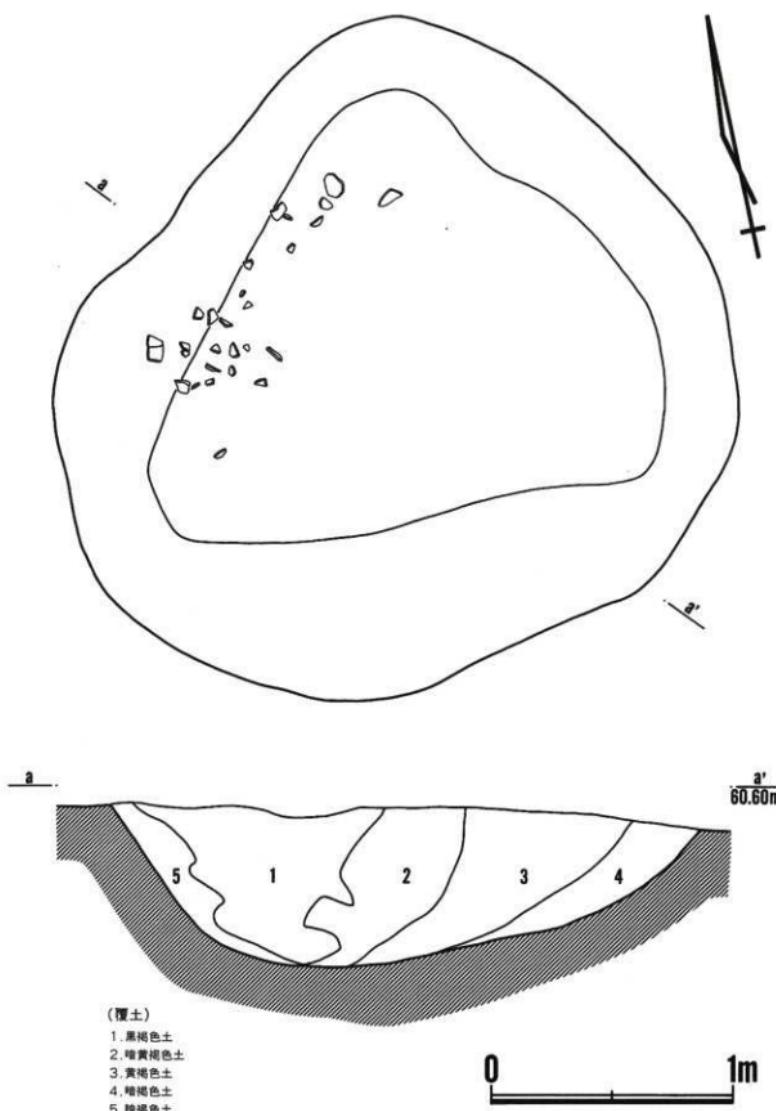
今回の調査で検出・確認した遺構は、以上のとおりである。

《参考文献》

- (1) 松本一男『中原遺跡発掘調査報告書』掛川市教育委員会(1984)
- (2) 松本一男『高田上ノ段遺跡発掘調査報告書』掛川市教育委員会(1986)



第9図 S P 実測図(4)



第10図 S X01実測図

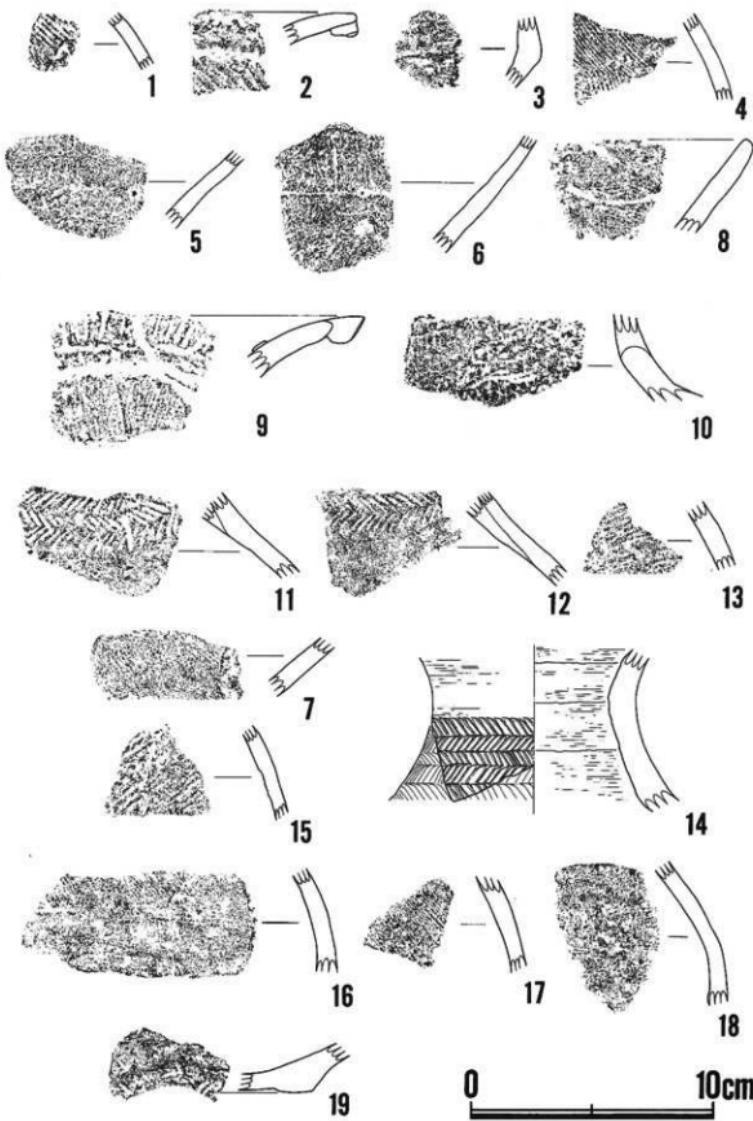
2. 遺物 (第11図～第15図)

今回の調査で出土した遺物はすべて土器の類である。図示したとおり出土品はすべて破片で、出土量はポリコンテナ (545×336×200) 2個分にすぎない。前回調査時の分でも少量であったことを考えあわせて、この出土品が少ないとそのものが集落跡周辺地でのあり方を物語るものであると考えたい。

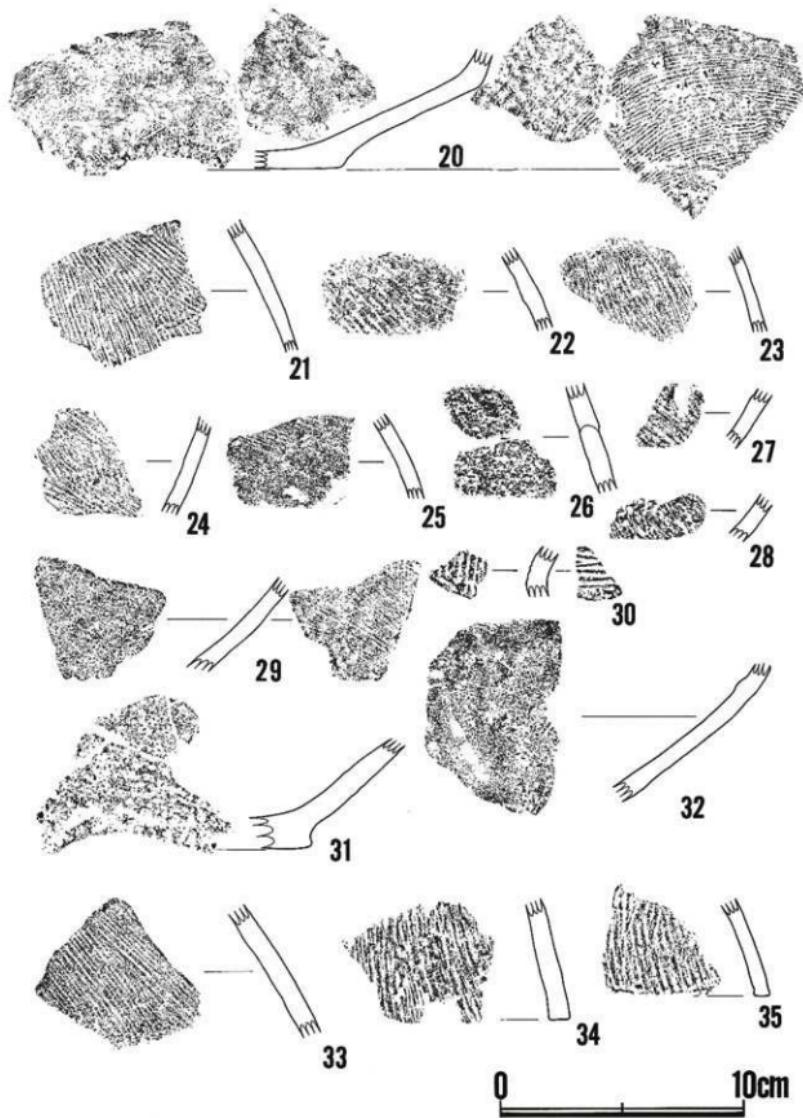
總出土土器のうちで図化に耐え得る資料を第11図～第15図に示し、他は割愛した。おおむね弥生時代後期後半から古墳時代前期初頭（古式土師器期）に属するものと考えられる。また図化しない資料もすべて他の時期に属さないものと觀ている。以下遺物番号の順に紹介していく。

第12図1～第13図46はすべて小穴から、第13図47～第15図87はすべてS X01からの出土である。内容分けすると1がS P10、2・3がS P11、4がS P13、5～24がS P14、25がS P15、26・27がS P21、28がS P23、29・30がS P29、31～35がS P30、36がS P31、37がS P32、38～40がS P33、41がS P34、42がS P35、43がS P36、44がS P37、45がS P38、46がS P40からの出土資料である。1は、壺形土器の肩部破片で、砂粒を含む黄褐色の胎土の上器である。2は、高环形土器の口縁部破片で、砂粒を含む黄褐色の胎土の上器である。器面はハケによる調整が施こされ、折返し口縁端部に櫛状工具による刻みがみられる。内面は横方向にヘラ磨きが施されている。3は、壺形土器の胴部破片で、砂粒を含む黄褐色の胎土の上器である。器面はやや荒れているがヘラ磨きが認められる。4は、壺形土器の胴上部破片で、砂粒を含む暗褐色の胎土の土器である。器面にはハケ調整が認められる。5と6は、同一個体と思われるもので、高环形土器の环部破片である。砂粒と金雲母粒を含む暗黄褐色の胎土で、器面調整は荒れている為定かでない。7も高环形土器の环部破片である。砂粒を含有する褐色の胎土で、器面はハケ調整が認められる。内面は明瞭でない。8は、單口縁の壺形土器口縁部破片で、砂粒を含む黄褐色の胎土の土器である。器面上部にハケ調整、下部がナデにより仕上げられている。9は、折返し口縁の壺形土器口縁部破片で、砂粒と金雲母粒を含む赤褐色の胎土の土器である。器面にはハケ調整、口縁端面にヘラ状工具による連続刺突が観られる。また内面には円形浮文の貼付が認められる。10は、壺形土器の頸部破片で、砂粒と金雲母粒を含む赤褐色の胎土の土器である。器面にはハケ→ナデが、内面にはナデ調整が認められる。11は、壺形土器の肩部破片で、砂粒と金雲母粒を含有する淡褐色の胎土の土器である。器面にはヘラ状工具による羽状刺突文とハケ調整が施される。12は、壺形土器の肩部破片で、砂粒を含む淡黄褐色の胎土の上器である。器面にはヘラ状工具による羽状刺突文が認められる。13は、壺形土器の肩部破片で、小砂利と金雲母粒を含む淡黄褐色の胎土の上器である。器面には繩文が施されている。14は、壺形土器の頸部破片で、小砂利・金雲母粒を含む黄褐色の胎土の土器である。器面下部にはヘラ状工具による羽状刺突文が認められる。15は、壺形土器の胴部破片で、小砂利と金雲母粒を含む淡黄褐色の胎土の土器である。器面には繩文が認められる。16は、壺形土器の胴部破片で、砂・小砂利を含む黄褐色の胎土の土器である。器面上部にはハケ調整、下部にはヘラ磨きが認められる。裏面は板ナデが施されている。17は、壺形土器の胴部破片で、小砂利を含む暗褐色の胎土の上器である。器面にはハケ調整が認められる。18は、壺形土器の胴部破片で、砂粒と金雲母粒を含む黄褐色の胎土の土器である。器面にはハケが認められる。19は、壺形土器の底部破片で、砂粒を含む暗褐色の胎土の上器である。器面にはハケ調整→ヘラ磨き、裏面には板ナデが認められる。20は、壺形土器の胴下部から底部にかけての接合資料で、小砂利を含む暗褐色の胎土の土器である。調整はハケ→ヘラ磨きで、裏面には板ナデ、ハケそれぞれが認めら

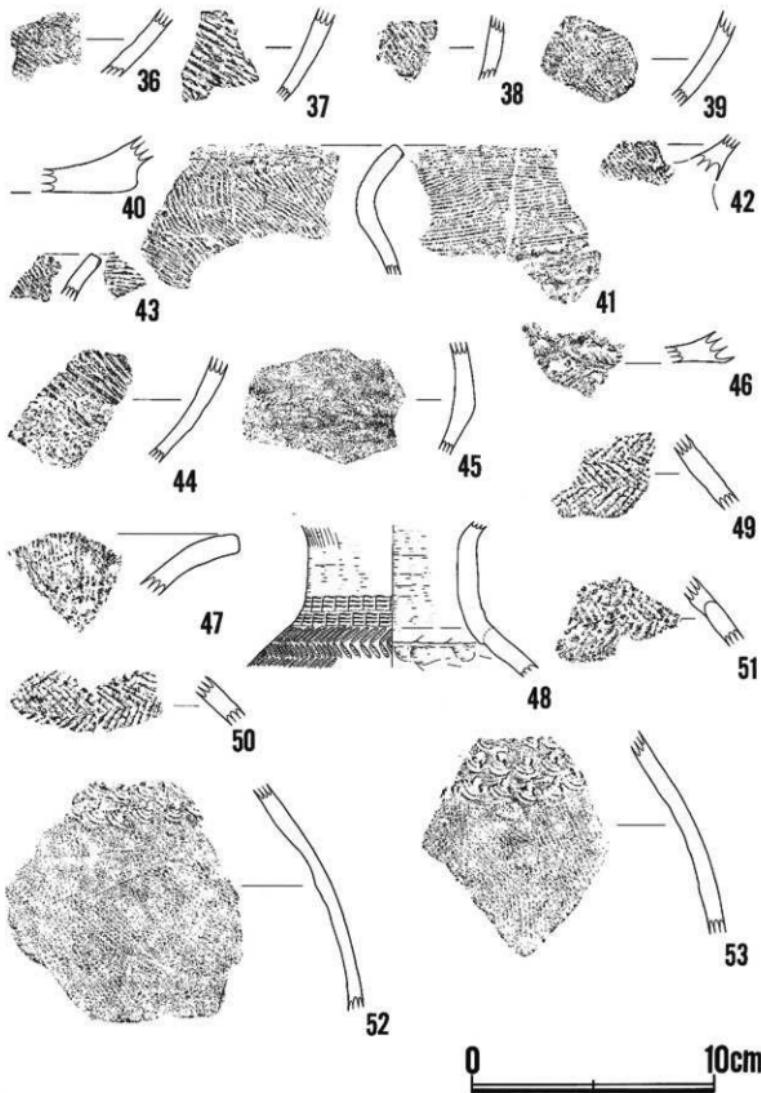
れる。21~24は夔形土器の胴部破片である。器面にはハケ調整、裏面には板ナテ乃至はナデが認められる。21は小砂利と金雲母を含む暗褐色の胎土を、22は小砂利と雲母粒を含む淡黄褐色の胎土を、23は小砂利と金雲母を含む暗褐色の胎土を、24は小砂利を含む暗褐色の胎土をそれぞれもつ土器である。25は、壺形土器の胴部破片で、砂粒と金雲母粒を含む赤黄褐色の胎土の土器である。器面にはハケ調整とヘラ磨き（？）が認められる。26は、壺形土器の胴部破片で、砂粒と金雲母粒を含む赤黄褐色の胎土の土器である。器面の状態が悪く調整はわからない。27は、夔形土器の胴下半部破片で、砂粒と金雲母粒を含む赤褐色の胎土の土器である。器面にはハケ調整が認められる。28は、夔形土器の胴下半部破片で、砂粒と金雲母粒を含む赤褐色の胎土の土器である。器面にはハケ調整が認められる。29は、壺形土器の胴下半部破片で、砂粒を含む黄褐色の胎土の土器である。器面は荒れており明確でないがヘラ磨き（？）が施されている。30は、夔形土器の口縁直下の破片で、砂粒を含む赤黄褐色の胎土の土器である。器面の表裏にハケが認められる。31は、壺形土器の胴下半部から底部にかけての破片で、小砂利を含む暗褐色の胎土の土器である。器面調整は保存状態が悪く明確でない。32は、壺形土器の胴下半部破片で、砂粒を含む黄褐色の胎土の土器である。器面調整ははっきりしない。33は、夔形土器の胴部破片で、小砂利を含む暗黄褐色の胎土の土器である。器面にはハケ調整が認められる。34と35は夔形土器の脚部破片で、34は小砂利と金雲母を含む赤褐色の胎土、35は小砂利を含む赤褐色の胎土の土器である。34・35それぞれ器面にはハケ調整が認められるが、裏面は、34がハケ、35がナデを観てとれる。36と37は夔形土器の胴下半部破片で、36は砂粒を含む赤黄褐色の、37は砂粒を含む茶褐色の胎土の土器である。38と39は夔形土器の胴部破片で、38は砂粒と金雲母粒を含む赤褐色の、39は砂粒を含む褐色の胎土の土器である。どちらの器面にもハケ調整、裏面にはナデが認められる。40は、壺形土器の底部破片で、砂粒を含む淡黄褐色の土器である。上部にハケ→ナデ調整が認められ、裏面には板ナテが認められる。41は、夔形土器の口縁部破片で、砂粒と金雲母粒を含む暗褐色の胎土の土器である。器面にはハケ目が、端部にはハケ目と刻み目が認められる。42は、夔形土器の底～脚部破片で、砂粒を含む赤褐色の胎土の土器である。器面にはハケ調整が認められる。43は、夔形土器の口縁部破片で、砂粒を含む暗褐色の胎土の土器である。器面にはハケ調整と、端部にハケによる刻みが認められる。45は、壺形土器の胴部破片で、砂粒と金雲母を含む黄褐色の胎土の土器である。器面にはヘラ磨きが認められる。46は、壺形土器の底部破片で、砂粒を含む暗褐色の胎土の土器である。内面には板ナテが施される。47~75は壺形土器、76~87は夔形土器で、それぞれ47が單口縁部、48~51が肩部、52・53が肩～胴部、54~72が胴部、73~75が底部、76・77が口縁部、78~87が胴部破片である。胎土は、砂粒を含むもの50・51・55・56・59~61・63・69・73・74・76・81で、それ以外は砂粒と金雲母を含む胎土である。色調は、黒褐色が47・56・65・78、赤褐色が48・75、暗黄褐色が49・58・59・62~64・76、黄褐色が69・83・87、赤黄褐色が73、残りの50~55・57・60・61・66・68・70~72・74・77・79~82・84~86が暗褐色を呈するものである。器面の状況は、47の表面ではハケ調整、裏面には櫛状工具による押引き状に連続の刺突文が施される。48~51には櫛状工具による羽状刺突文が認められるが、48にはその上部に櫛状工具による押引き法による平行沈線が認められる（波状に近い）。52・53は同一個体でハケ調整→櫛状工具による扇形文が観られる。54~66には基調としてハケ調整が認められ、68・70・71・75にはハケ調整→ヘラ磨きが認められる。その他の壺形土器破片については器面の保存状態が悪く調整が判断できないが、おおむね上述した土器群と同様と考える。裏面は胴上、中部が板ナテ乃至はナデ、底部付近ではハケ目が残るものである。76~87の夔形土器では、76の口縁部破片端部に櫛状工具による刺突刻み、77の口縁部破片端部にヘラ状工具による刺突刻みが認められる他は、器面に荒目のハケ目が認められ、裏面にはナデ乃至は板ナテが認められるものである。



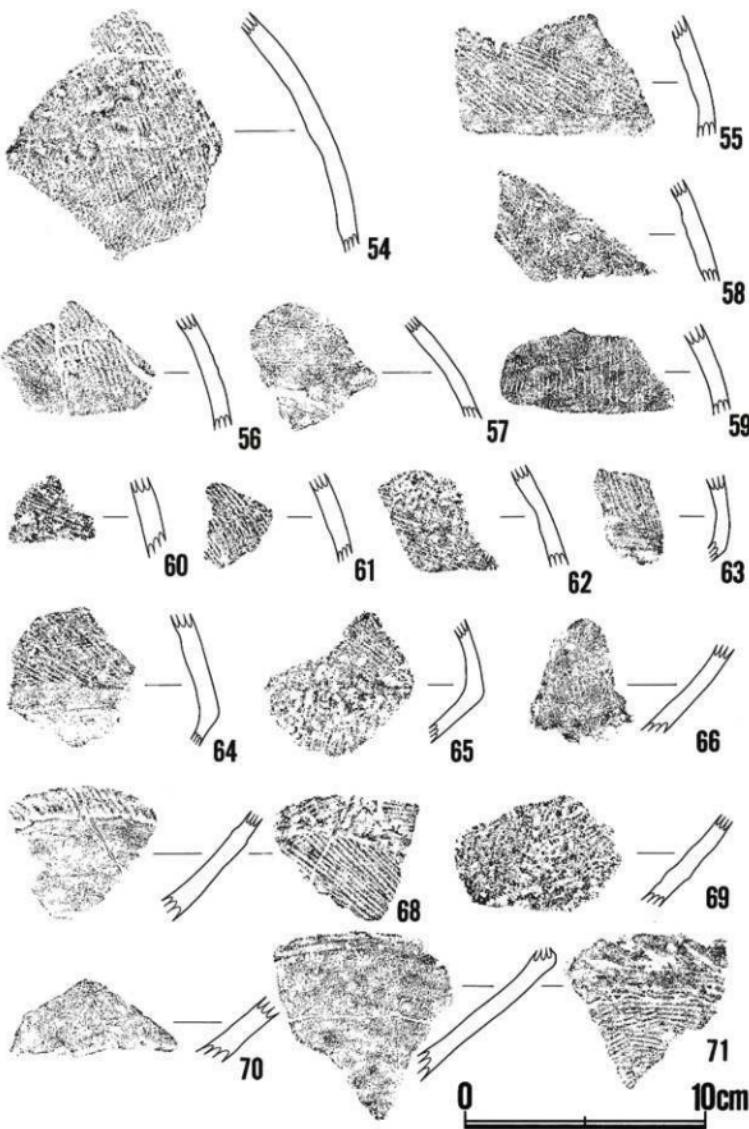
第11図 出土遺物(1)



第12図 出土遺物(2)



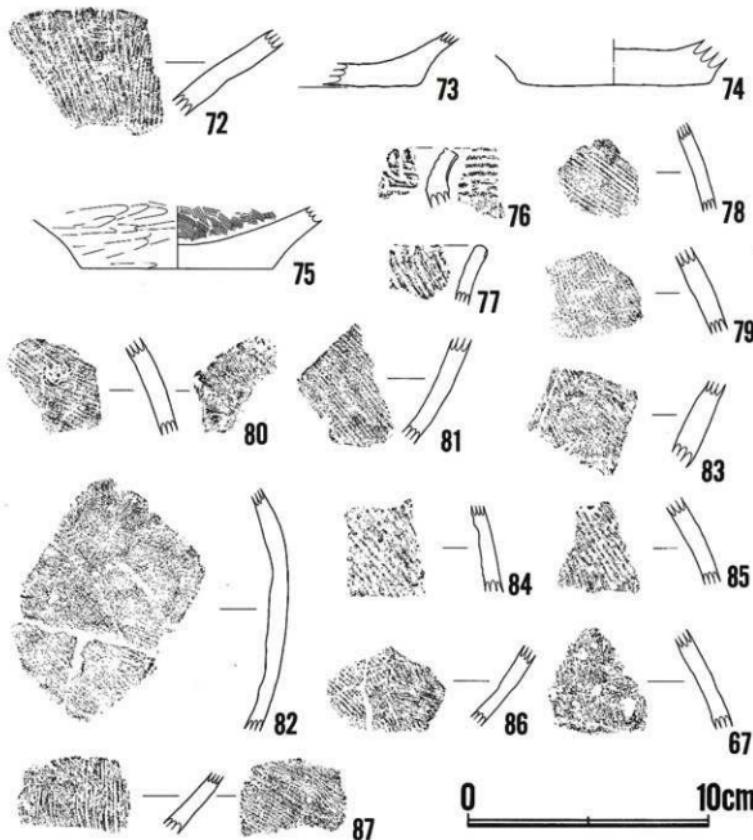
第13図 出土遺物(3)



第14図 出土遺物(4)

以上が今回の調査で出土した遺物の説明である。

前回同様今回もまた土器片が出土遺物の中心であったが、これは遺跡とくに集落跡周辺における出土遺物のあり方そのものと考えられる。また、今回の調査における遺物の出土の仕方は、すべて遺構内（遺構と呼ぶべきでないS X01からの出土遺物も含めて）からの出土で、遺構外からの出土はなく（言葉を変えて言うならば遺物包含層がなかったということか？）このこともまた集落跡周辺における出土遺物のあり方を示したものと考えたい。



第15図 出土遺物(5)

III 成 果 と 課 題

これまでに述べてきたように、今回の発掘調査で確認した遺構は、土坑（S F）が4、小穴（S P）が104、時代及び意味不明遺構（S X）20である。ここでは、本報告のまとめとして(1)今回の調査地点が高田上ノ段遺跡のどんな地点に位置するのか？(2)今回出土した遺物から高田上ノ段遺跡がいつ頃営まれていた遺跡であるのか？この2点について、遺構の配置、遺物の出土状況、出土遺物の特徴、あわせて調査所見から推察してみたい。

(1)今回の調査地点が高田上ノ段遺跡のどんな地点に位置するのか？……結論から述べれば、高田上ノ段遺跡の西限域を今回調査したものと考えている。昨年度調査した地点では、調査区南東地点に堅穴式住居跡1基（S B01）を検出、集石土壙（S F03・S F08）がいずれも調査区の東寄りから、小穴（S P）が全体として調査区の東寄りからそれぞれ検出していることから調査区の東域に高田上ノ段遺跡が広がっていることを推察した。今回の調査では、人為的遺構はかなり少ない状況であると考えているが、柱穴状と思われる小穴が調査区の東寄りに多いこと、また土器片がまとまって出土したS P14・S P30がいずれも調査区の東域に属すことから、やはり高田上ノ段遺跡の中心部分は前回調査地点ならびに今回調査地点の東域に位置するものと推察する。

次に遺物の出土状況から検討を加えてみると……。今回調査した周辺、あるいは広く吉岡原・高田原一帯では、自然堆積土中で遺物包含層となりうる土に黒色土あるいは暗褐色土があると考えられている。今回の調査地点でも所々において黒色土層ならびに暗褐色土層を確認しているが（第4図参照）それらからの遺物の出土は非常に少ない。また見方を変えて、今回の調査で出土した遺物はその多くが遺構内からの出土で、遺構外からの出土遺物はほとんどであった。つまり遺物包含層となりうる土＝黒色・暗褐色土が存在するにもかかわらず、今回の調査地点では事実上遺物包含層が存在しなかったのではないか。ということは、遺物出土状況からも遺跡の本体（遺跡の中心部）からはずれた地点であることが裏付けられるのではないだろうか。

以上の二視点からみて、先程述べたように今回の調査は高田上ノ段遺跡の西限域を調査したものであったと考えたい。

(2)今回出土した遺物から高田上ノ段遺跡がいつ頃営まれた遺跡であるのか？……このことに関して次の視点から弥生時代後期後半あるいは継続したとしてもS字状口縁甕・小型丸底壙・器台等を伴わない古墳時代前期初頭まで営まれた遺跡ではないかと推察している。

つまり出土した土器破片を観察してみると、①高环形土器では、2・5・6（いずれも第11図）が確認されるが、2では折返し口縁をもつ高環の口縁部破片である。5・6は環身の胸部破片である。この端部の状況を観ると櫛状工具により明瞭な刻みが施されていること。また2・5・6の傾きから考えるに環部の法量が相当量大きなものであること。②壺形土器では、52・53（第13図）の櫛描き扇形文のある土器と54（第14図）の土器の傾きを観るとかなり立ち上る型が観て取れるもので、これは菊川式土器のやや古い型に似るものではないかということ。48（第13図）土器は、肩部から頸部にかけての部位破片であるが、肩部の羽状櫛刺突文の上面に櫛状工具による押引き平行沈線が観られる。20（第12図）・45（第13図）・63～65（第14図）は、胸部の際大幅を測る屈曲部にあたる部位の破片である。これらは全て、屈曲の陵が明瞭であり、そこに施されたヘラ磨きが丹念に施されていること。③甕形土器では、数多くある甕形土器の破片の中で口縁部破片のものは41・43（第13図）・76・77（第15図）などであるが、これらは全て端面が四角く、なおかつ端部にハケによる刻みがわり

と明瞭に施されていること。以上の状況から今回報告した土器群は、おおむね弥生時代後期後半期の菊川式土器群に含まれるものと判断したい。ただし、図化した土器は全て破片・小破片である為、古式土師器（例えば、S字状口縁甕・小型丸底壺・器台などを含む土器群）と共にてもよい壺形あるいは壺形土器の破片も含まれていると思う。しかし出土した土器の中には、S字状口縁甕・小型丸底壺・器台などの破片は一片も確認されておらない状況を考えると、これらの器種をもたない古式土師器期の古式土師器が含まれていると言うべきかも知れない。いずれにしても、高田上ノ段遺跡が集落として営まれたのは、弥生時代後期後半期あるいは古墳時代前期初頭期までであると結論づけたい。⁽¹⁾ 高田上ノ段遺跡の発掘調査は、前回（昭和60年度）と今回（昭和61年度）の二回二地点について調査を行ったが、どちらも遺跡の中心の状況を確認したものでなく、遺跡の周辺状況を確認したにとどまっている。今後も茶園改植に対する注意を怠ることなくし、高田上ノ段遺跡の中心部付近を調査する機会があれば、遺跡の具体的な状況の把握に努めたい。了

《参考文献》

- 1 松本一男「高田上ノ段遺跡発掘調査報告書」掛川市教育委員会（1986）

図 版



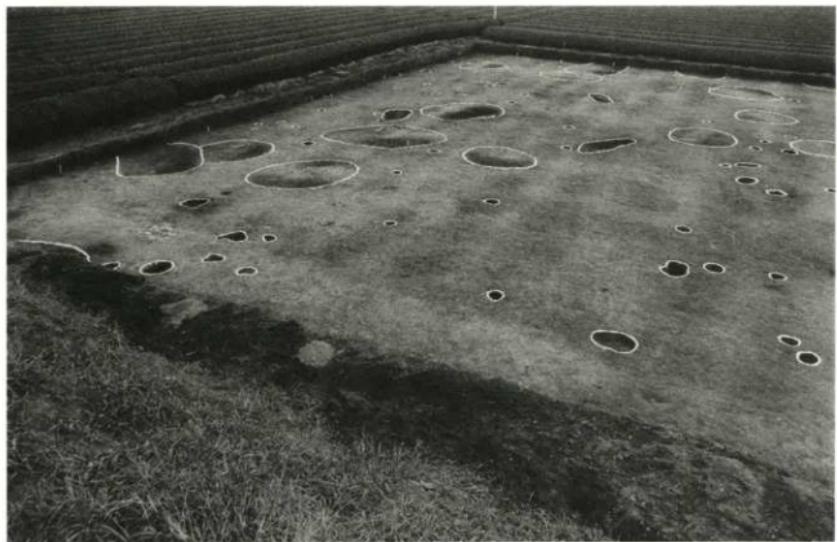
調査地点選定(航空写真)



調査地点近景(発掘調査前)



調査区発掘状況(東から)



調査区発掘状況(北から東域)



調査区発掘状況(北から西域)



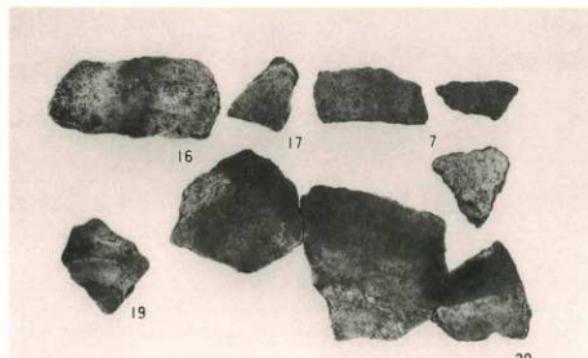
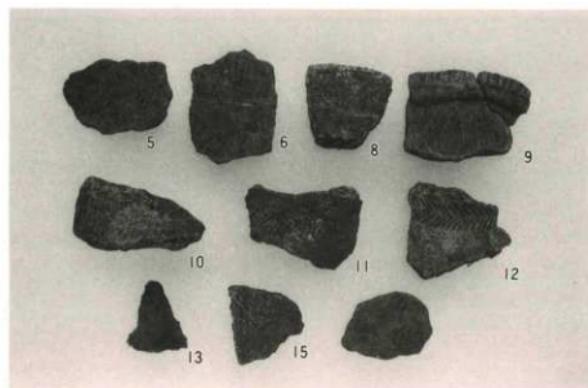
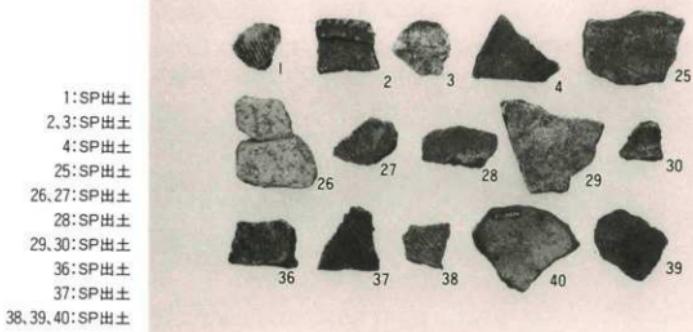
SP14遺物出土状況



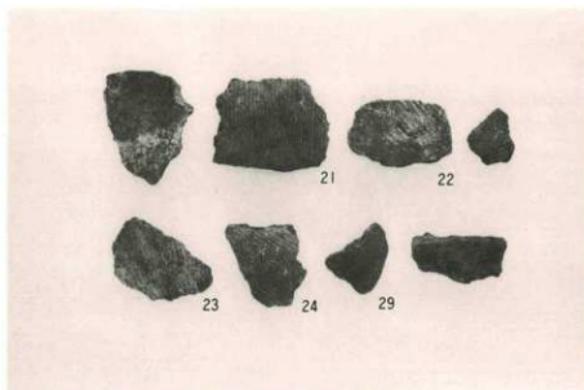
SX01土層断面



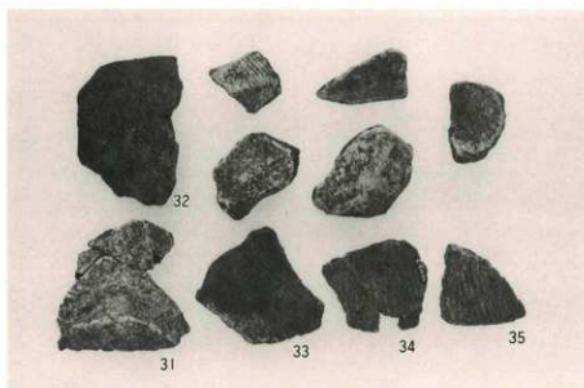
SX01完掘状況



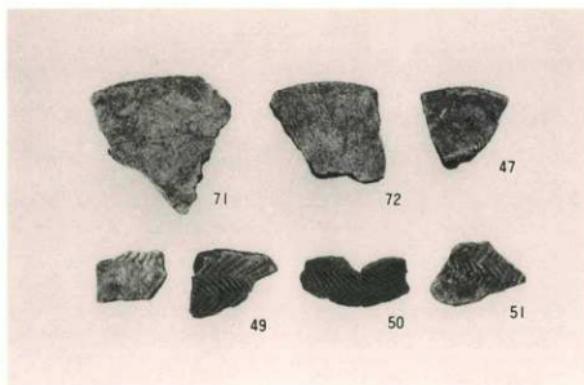
SP14出土(3)

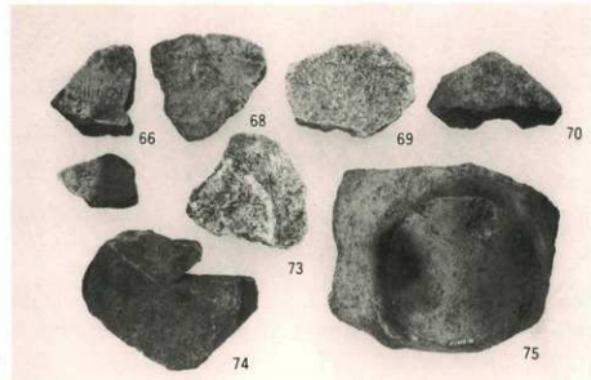
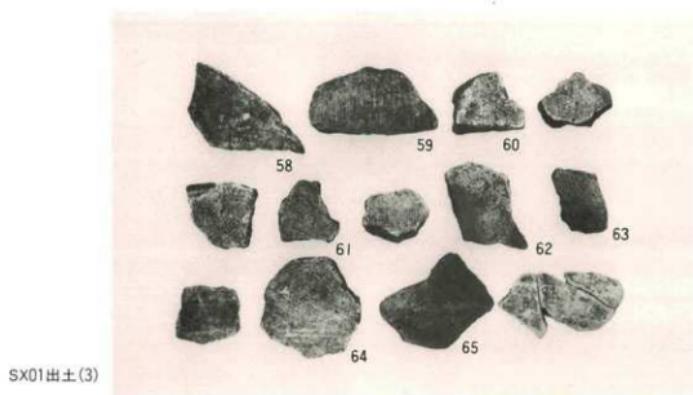
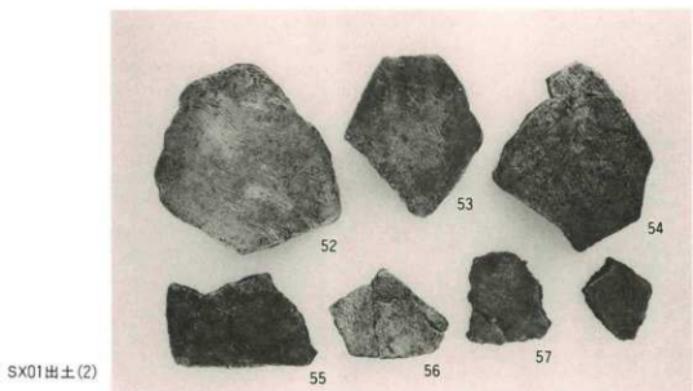


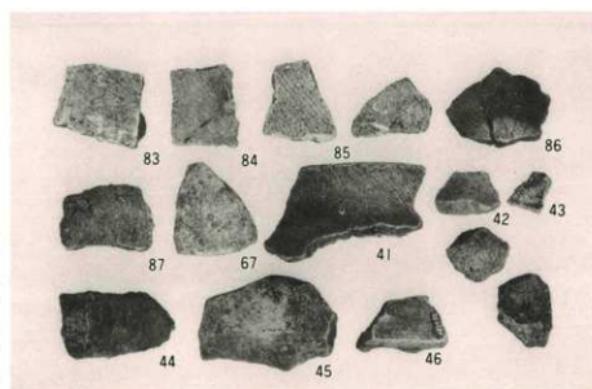
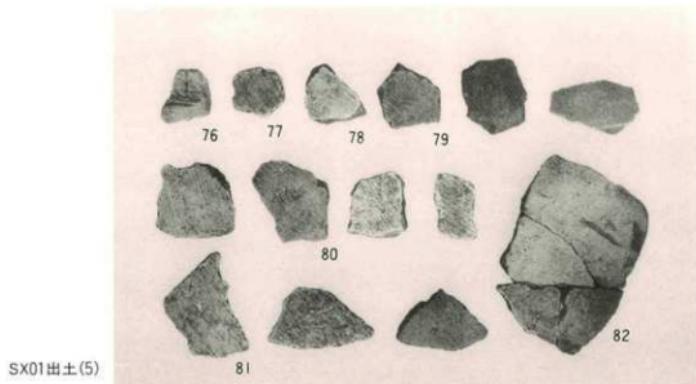
SP30出土



SX01出土(1)







高田上ノ段遺跡

発掘調査報告書

昭和62年3月30日

編集発行 掛川市教育委員会

掛川市水垂51

TEL(05372)4-7773

印刷所 株式会社三創

静岡市中村町166-1

TEL(0542)82-4031

